

講演会

5/30 講演会&ギャラリートーク 10～20 代の方の感想をご紹介します
(掲載許可をいただいた感想に限ります)

戦後 70 年という節目に、安倍総理はいたる所で「日本は戦後 70 年、平和の道を歩んできた」と発言しています。且、憲法 9 条の改正についての議論の中で、「日本には平和国家としてのブランドがある」という意見が飛び交うことがありました。それほど、日本は「平和」ということに議論の重心が据えられていて、まさに肯定的にとらえられているように感じます。しかし、裏を返せば、70 年前には戦争があったが、今の私達の年代は、その「平和」しか知らないということだと思います。私達は、戦争を余りにも知らなさすぎるのではないのでしょうか。今回の林先生の著書を拝読させて頂きました。今回のご講演で、日本という国家の戦争の歴史を伺い、特に、「固有名詞を持った“人”が戦争をしたのであり、“戦争”という抽象的な概念でいくめて終わってしまっても良いのか。その“人”一人一人が持つ戦争加害者・被害者にスポットを当てていかねば」というお言葉がとても印象に残りました。私たちは、靖国のように「シンボル」とマクロに捉えるだけでなく、ミクロに一人一人のエピソードを、我々のような世代の者が継承していかねばならないと、痛切に感じました。そして、過去から目をそらすのではなく、今を直視したいと思います。

(京都府 20 代 学生)

上官の命令に対する絶対的服従、皇軍としての意識、捕虜を認めない等の精神が、1930 年代以降に日本陸軍に定着したという事実には驚きました。講演会を通して、戦前戦中の日本の「加害」と「被害」の実態を明らかにし、考えていくためには、しっかりと近現代の歴史を学ぶことが必要だと思いました。

(京都府 20 代 学生)

日本は「加害者」という側面を無視しがちであるという話はよく耳にしますが、今日の講演会で印象的だったのは、「日本は『被害』の面すら深く考えようとしなさい」という言葉でした。私自身広島出身で、戦争を理解する際、原爆の被害者を中心にしてしまいがちなように思います。この考えこそ「被害」を軽視したもののように思い、深く反省すると同時に、人々にこのことを発信していく必要性を感じました。このような機会を設けて頂いて、ありがとうございました。

(京都府 20 代 学生)

事実から目をそむける事が何よりも危険なことだと思いました。また、加害をただ批判するだけでなく、その責任を考え、何故加害者になったのか、その原因を正確に理解、追求した上で、未来に希望を持ちたいと思いました。

(大阪府 20 代 会社員)

どの集団においても本当の事実としての現実を見た者がバッシングを受けたり、つぶされたりして様々な失敗へと走って
いってしまうのだと思う。加藤哲太郎氏の話を知っている最中に第二次世界大戦直後の行われた（うる覚え）だが
偽電気椅子を用いた心理学の実験を思い出していた。偽の電気椅子に役者を座らせ、被験者は椅子に流れる（実際
は流れない）電流のコントロールをまかされる。被験者の隣には「博士」と呼ばれる人がいて被験者へ流す電圧とタイミ
ングを指示するというものだ。これをきっかけに人間は命令に従えばどんな残酷な行為もちょうちよなく行えるということが
わかったといわれる。しかし、『おかしい』と思ったなら止めることができたはず、と考えると、命令や概念が人を苦しめたり、
殺したりはしない。結局は個人が個人を苦しめるということだ。心理学的にも歴史上の事実と分かっていることであるはず
なのに、何故（日本だけに関わらず）人間は学び変化させていく事が出来ないのだろうか。それが『人間』という生物
の本能的生物的欠点だとして自覚が出来ないのだろうか。良くも悪くも、やはり歴史はくりかえす。戦争問題だけでなく、
正義とは何か、責任とは何か、人間は本質的にどんな生き物なのか。哲学的にも喰い込んでくる話だと思った。

（京都府 10代 学生）

批判を加えられながらも、いまだ日本の法学に強い影響のある美濃部達吉が、植民地の問題
を宙に浮かせていたことが長谷川正安氏によって言及されたのと同様に、山本や米内、井上
たち海軍“良識派”がダブルスタンダードであったことも問題にしなければならない。しかし、
彼らの責任を追及して私たちが責任から逃れるべきではない。彼らを“評価”してしまった私た
ち自身の問題という次元で直視するべきである。かつて人間の前に、あらゆる神学的手続きに
よって創られた“準拠”すなわち神、王、共和政理念といったヴェールがあったが、それらが“失
敗”した後、人間の前に“民主制”という準拠が残った。この準拠ははたして絶対的で安
全なものだろうか。あらゆる言説を用意したところで、そのヴェールの向こうにある“枠組み”には、
私たちの主体としての何か不気味なものが隠されているのではないか。今、“デモクラシー”と
いう言説はどこへ向かっているのか。

（兵庫県 20代 院生）

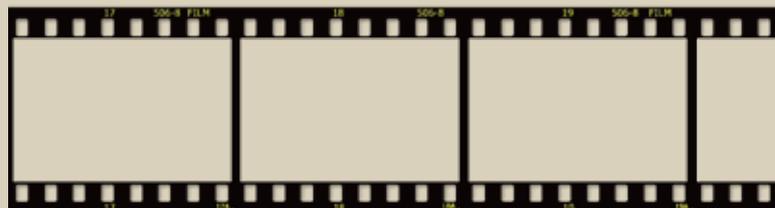
70

第二次世界大戦を振り返るとコンプレックスと差別意識や政治状況など戦後 70 年経っても解決できてないことだらけで危機
感を覚えます。戦争に対する考え方だけではなく社会の様々な側面で加害と被害の重層構造や反省のなさを感じます。
例えば、日本が死刑を認めていることも、犯罪をおかすにいたった背景を社会全体で理解して解決に向けて取り上げて考え
るのではなく、死で問題を解決しているかのように見せかけている。問題を直視せずにいるところは戦争の歴史の振り返り方と
似ていると思いました。これからも学び考えていきます。ありがとうございました。

（和歌山県 20代 教職員）

ギャラリートーク

2015年度 春季特別企画
山本宗補写真展
戦後はまだ…
刻まれた加害と被害の記憶



素直に感じた事を書かせて頂きますと、もう、本当に言葉になりません。山本さんがどのようにこの写真を撮って、どんな心持ちでこの取材を続けられたのか、その空気まで伝わってくるようで、感極まりました。この写真におさめられた方々、一人一人の表情に込められた想いを、この解説なしにみることはできなかったかと思います。写真集も買います。今日は、ありがとうございました。
(京都府 20代 大学生)

「個を見つめる」をテーマにした写真展のようにも思いましたが、お話を聞くにつれて、日本政府の実態が裏に見えるようになりました。日本国内にとどまらず、中国やフィリピン等にも深く関係した人々の話や写真があったので、戦争というものを他面的に考えられたように思います。
(京都府 20代 大学生)

実際に山本さんのお話を聞くことでより深く理解することができた。写真が持つ力強さにも圧倒され、今後、私自身も戦争の実際がいったいどのようなものであったかということについて、考えていきたいと思う。
(京都府 20代 大学生)

あると知らなかったギャラリートークに参加できて本当によかったです。日々高校生と過ごしているので写真集を利用して山本さんが伝えてくれていることを高校生にも渡していけたらと思います。貴重な教材をつくって頂いて本当にありがとうございました。また、現代についての社会問題の発信も期待しています。
(和歌山県 20代 教職員)

